

非科学を超えた先達と量子水のふしぎ

ティラー/アインシュタイン理論と

シャウベルガーの求心性螺旋



量子水de健康な会

ウィリアム・A・ティラー博士「ティラー／アインシュタイン理論」

～意識は、物質に影響を与えられる～

「ティラー／アインシュタイン理論」は、物理学者で、米国スタンフォード大学の材料科学・工学部名誉教授、ウィリアム・ティラー博士(1929～2022)によって提唱された、光速度を超えない物質次元とそれを超えるとされる精神・意識次元の存在を統合的に表したモデルのこと。

素粒子のような量子は、光速度内外の界面を行き来しながら、物質として現れたり波動として存在したりしているために、2つの隔たれた粒子が瞬間的に相互作用する量子もつれ現象も、2つが光速を超える振動領域を通じてつながっていることで説明できるとしている。

「人間の意識は、物質の世界に、ほんとうに影響を与えられるのだろうか？」

結晶科学の第一人者だった博士は、水晶振動子が、波の方向を回転させることで量子情報を調整できるとした仮説を実証するうちに遠隔操作に興味を持ち、とうとう、生態系における微細なエネルギー(思考や思念)を装填した簡易装置を用いて、科学的プロセスに影響を及ぼすことが可能なのかを確かめようとした。「祈りは届くのか」「念じることに効力はあるのか」、人類が内心では問い続けていたが、一步間違えばとんでも科学と揶揄されかねないことを実験室で検証しようとしたのだ。

アインシュタインの相対性理論では、物質が光速度(c)に近づくにつれて、その質量(m)は無窮大に近づくと言われるが、博士は、物理的な物質は光の速度を超えられないが、光速を超えた先に、質量を持たない別の次元が存在するのではないかと仮定した。わたしたちが日常で触れる物質—からだも水も「光速度以下の世界」に属しているが、もし、光速を超える世界があるのだとしたら、どうなるのか？

物理学には「タキオン」という仮想粒子の概念がある。光速を超えて動き、時間の流れがわたしたちとは逆になる、と仮定される粒子だ。博士は、意識や情報はこの「光速超過の領域」に属しているのではないかと考えた。

つまり、世界には、わたしたちの目に見え手に触れたかに思える物質の世界(粗い層)と意識や情報が流れる世界(細かい層)の2つがあるというのだ。そしてその2つを隔てる「遮断幕」が意識によって開かれる、と。

博士の実験は、シンプルで大胆だった。

修練した瞑想者たちが、特定の「意図」をブラックボックスに向けて装填する。そのデバイスを実験対象の側に置く。結果は驚くべきものだった。なんと、水のpHが、意図し念じた方向に変化したのだ。通常、pHを1変化させるにはかなり大きなポテンシャルを必要とする。しかし、この実験系では、何の手も加えてはいないのに、1以上の変化が繰り返し再現された。

「意識による意図が、繰り返し向けられた空間では、物質と意識の界面が変容する。2つの層を隔てる幕が、薄くなる」と博士は結論し、この状態を「コンディションド・スペース (条

件づけられた空間)」と呼んだ。水は、その「幕」が薄くなりやすいという。

水は、水素と酸素の化合物(分子)で、絶えず離合集散して、一刹那(100京分の1)として同じ形態をとどめてはいない。しかし、同時に一時的にでも記憶(情報)を保持しやすい性質を持つという。例えば、ホメオパシーのように、希釈をくり返し、もとの成分は限りなくゼロに近い状態にあるにもかかわらず、その水が効力を発揮するように、博士の実験で水のpHが変化したのも、単なる偶然ではないだろう。

水はそれ自体が、光速超過の領域からの目に見えないシグナルをキャッチするアンテナのような存在なのかも知れない。わたしたちの細胞内液の70%は水なのだから、その水の性質や保持した情報が変われば、必然的にからだを受けとる影響は大きいにちがいない。

〈column: とんでも科学の素〉

ふしぎなことに、同じやかん、同じガスコンロを使って、よーいどんで湯を沸かしても、量子水に懐疑的なひとと愛用者では沸騰までの所要時間がちがうという。意識はエネルギー、水は光速超過の領域の情報をキャッチする。もはや、とんでも科学と揶揄している場合ではない。

まあ、でも、信じるか信じないかはあなたの勝手だから。野村社長は、ティラー先生にたったの15分面会を許されて、はるばる西海岸に飛んだ。

大先生は、コアを手のひらに乗せて微笑み「ここから自由電子が出ていますね」とおっしゃった。見えるわけではないが感じるのだろう。気功、レイキ、ヨーガの達人、みんなそういう。

ただ、感じてもしないひとでも結果は出る。いちばん早いのがネコや犬。彼らには猜疑心はないし、飼い主の愛情を感じて素直に出された水を飲む。

昔、日本には養老の滝があった。今では、もう枯れてしまったにちがいない。

ヴィクトル・シャウベルガー「求心性の螺旋」 ～自然は、外から力を加えない。内から渦を巻く～

オーストリアのヴィクトル・シャウベルガー（1885～1958）は、アルプスを臨む森林監視員として長く従事し、その偉大な功績によって“水の魔術師、と呼ばれた。

彼は何十年も、山の沢を観察し続け、夜明け前の冷たい時間に川は最もよく流れること、満月の夜は魚が遡上すること、水は曲がりくねった道を好むことといった自然界の摂理を熟知することになった。

そして彼は、現代科学とはまったく逆の結論に辿り着いた。

「自然は、遠心力ではなく求心力で躍動する」

わたしたちの文明は「外から力を加える」技術を発展させてきた。エンジンで燃やし、ポンプで押し出し、直線のパイプで水を運ぶ。彼はこれを「死の技術」と呼んだ。

自然の中で水はどう動くのか。川は蛇行し、渦を作り、内側に向かって回転しながら流れる。これが求心性の螺旋運動。外に向かって広がる遠心力ではなく、内側に向かって収束する求心力—これが、自然の運動の本質だと彼は悟ったのだ。求心性の螺旋を簡単な図形で表すと逆向きの▽になる。エネルギーは、高い方から低い方へ流れる。それが自然の掟であり秩序だ。鳴門の渦潮やトルネードのようなダイナミックなエネルギーに象徴されている。

冷たさと螺旋が、水を「生きた水」にする。彼は摂氏4°Cの水の特異点に向かうのを「正の勾配」、そこから離れるのを「負の勾配」と区別した。自然界では、正の勾配は生物の創造と組み立てに使われ、負の勾配は、分解とリサイクルに使われる。正の勾配が支配的になってもたらされる精妙なエネルギーは、生物多様性と進化へと向かわせるという。

水は、冷たく、暗く、螺旋を描いて動くとき、最もエネルギーが高まり、生命を育む力を持つ。

逆に、温められ、直線のパイプを通り、塩素で処理された水は、そのポテンシャルを失い「死んだ水」になる。自然豊かな山奥の岩清水がおいしいと感じるのは気のせいではないだろう。

1930年、彼は「インペラー」と呼ばれる木製の装置を設計した。水を外から押すのではなく、水自身が内側に向かって自然に螺旋状に回転するように誘導する装置だ。水をポンプで押すより、はるかに少ないエネルギーで水が動き、生き生きとした水が生まれるという。

「自然を模倣せよ」人工的な力で支配しようとするな一彼が訴えたのはこれだった。

水が自ら動きたい方向に動くように条件を整える。螺旋の経路を与え、適切な温度を保ち、光を遮る。すると水は、ひとりでに自らの内なる力が表出して最もエネルギーの高い状態になる。

〈column: 似たものどうし〉

量子水を生み出す γ G7の心臓部は、ステンレスの六角コア(フィールド変換器)。

これを層状に組み込んだ、水道管元付タイプのニュージーワンエルを見たことがあるひとならわかるだろう。

シャウベルガーがつくった木製とは異なるものの、筒の中に配置された、水が通るとシャカシャカ音を立てるコアを通過するうちに、勢いよく渦を巻いた水が、内側に回転しながら流れ続ける。流体原理がとても似ている。シャウベルガーは自然を観察して答えを導き出したが、野村社長は、天から降ってきたという。

電気分解のイオン水やスクリューで圧壊させるナノバブルのように外から無理やりエネルギーを加えたりはしていない。

いのち輝く自然の生きた水、それが量子水。

ステンレスの筒の中は、夏でもひんやり冷たく暗い。自然界の水の性質に真摯に向き合った水の魔術師が発見したのと同じ水のふしぎが、なせだかそこに一部だが再現されている。



参考文献: リン・マクダガート「意思のサイエンス」、ケイ・ミズモリ「不都合な科学的真実」、オロフ・アレクサンダーソン「渦巻く水の超科学」

2026©量子水de健康な会